

あれこれ

12人の絵本作家が描く応援カレンダー原画展

2018年1月13日(土)~21日(日)
堺町画廊 〒604-8106京都市中京区堺町通御池下
鳥丸線鳥丸御池駅から徒歩5分
T/F 075-213-3636 定休日月曜 P無
▶期間中、寄付先の保養キャンプの紹介など、トークイベントや「カレンダーカフェ」を開催予定。1月20日にはショートステイ信楽の玉崎洋子さん登壇予定。くわしくはHP(<http://sakaimachi-garow.com/blog/>)でご確認ください。

絵本作家が描く応援カレンダーFBページ
<https://www.facebook.com/ehoncalendar/>
(一部1000円)

『戦争と農業』 著者/藤原辰史
インターナショナル新書 015 おすすめ本!
あまいろだより 24号特集で登場いただきました藤原辰史さんの新著です。滋賀で何度も開催した「食堂付属大学」というお話から生まれた本です。

二十世紀以降の戦争や政治が変質している根っこには、効率を重視した食の仕組み、それを支える農業の仕組みがあった! (HPより)

藤原辰史/京都大学人文科学研究所准教授。『カブラの冬』(人文書院)、『稲の大東亜共栄圏』(吉川弘文館)、『[決定版] ナチスのキッチン』(河合雄雄学芸賞受賞)、『食をすること考えること』(共に共和国)、『トラクターの世界史』(中公新書)など。



声をつなぐ市民ラジオ
ことばにする
耳をかたむける
AMAIRO
CHANNEL
あまいろ
チャンネル
<http://www.aolbiwako.org/amairo-channel/>

あまいろだより(天色便り)第32号
あまいろ探偵団、走る!手づくり市民メディア
特集/ふたりの絵本作家にきく 子どもたちへの思い
発行日/2017年12月15日
編集/あまいろ探偵団
(鎌牧生・岸田知之・北岡七夏・さむきかん・志賀未来・中野和子・藤井朋子・森優子)
表紙タイトル/岸田知之
発行/特定非営利活動法人碧いびわ湖
~大切なことを他人まかせしない、自分たちで力をあわせてつくる~
〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦3番地
TEL0748-46-4551 FAX0748-46-4550
Eメール info@aolbiwako.org
ブログ <http://aolbiwako.shiga-saku.net/> 
びわ湖の森を元気にするkikitoペーパーを
使用しています(びわ湖の森の調伐材活用) 



あまいろだより

天色便り
あまいろ探偵団、走る!
手づくり市民メディア
第33号 2017.12.15



ふたりの絵本作家にきく 子どもたちへの思い

暮らしのコラム

憲法が改正されると 自由がなくなるって本当?

伯宮幸明
Sachiaki Takamiya

衆議院選挙は自公の大勝で安倍政権が継続されることになった。しかも改憲勢力で3分の2の議席を確保したので、安倍政権は憲法改正の動きをどんどん進めていくことができる。長年危惧されてきた改憲が本当に行われてしまうかもしれないのだ。

ところで、憲法改正の何が問題なのだろうか。よく、憲法という9条が取り沙汰される。でも、北朝鮮の行動とかを見ると、日本もある程度の国防力は強めたほうがいいし、9条が足かせになっているのなら思い切って変えてもいいのではないだろうか。そういう意見もあるだろう。確かに国防については、ただ9条改憲に反対するのではなく、基地問題、日米地位協定など、様々な事柄をすべてテーブルに出し、今後日本をどうやって守っていくかということ、与野党、そして国民を含めて議論していく必要があると思う。

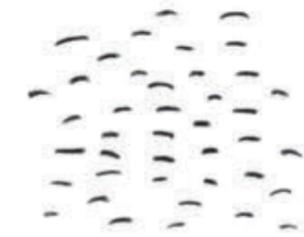
しかし、残念ながら、そうした議論が持たないのが安倍政権の問題なのだ。安保関連法案を可決する時も、共謀罪の時も、議論が不十分のまま、強引に通した。衆、参両院で3分の2以上議席を確保しているとそういうことができちゃうのだ。森友、加計問題に関して「きちんと説明する」と言いながら、しなかった。加計問題について説明する予定でいた臨

時国会の冒頭で衆議院を解散したことも記憶に新しい。

では、安倍さんが進めたい改憲とは何なのか。自民党の改憲草案を見れば一目瞭然だ。一言で言うと、現憲法を明治憲法に戻すこと。つまり、戦前の状態に戻すということ。さらに言うならば、個人の自由や権利よりも、集団や国家が大切にされるということ。

教育では、集団行動が重視され、個々のニーズに合わせた多様な教育ではなく、画一化されたものになっていく。そして、戦争が始まれば、今、森などで遊ばせている僕らの子供たちが、軍隊に召集されるかもしれないのだ。それに対して反対意見を述べようとしても、表現の自由は公益などに反する場合は認めないという第21条の改正で、自由にもが言えなくなるかもしれない。あらゆる部分で、今当たり前にある自由が奪われる。例えば、農地は企業に明け渡しなさいなどと言われ、耕作する自由すらなくなるかもしれないのだ。

ただ、希望はまだ残されている。国民投票だ。憲法改正には国民投票で過半数の賛同を得なければならない。来年か再来年には開催されるかもしれない国民投票に向け、いかに世論を盛り上げるかにかかっている。僕は、リベラリストという新しいファッション文化を滋賀から日



本中に向けて発信していくことを提案する。LOHAS と似たようなものだが、そこに若干政治色のついたもの。半農半X、ローカル、オーガニック、自然育児、フリースクールなどのキーワードにリベラルがついたもの。1%の富裕層の利益ではなく、99%の市民の自由と幸せのための政治を支持する文化。滋賀はマルシェ文化やくらしとせいじカフェなどが充実しているので、発祥の地として相応しい。県単位でここまで広がっている場所は珍しい。東京でもない、大阪でもない、田舎である滋賀から発信することに意味があると思う。

伯宮幸明/ Zen・クエスト代表。滋賀県の里山で農的暮らしをしながら、作家、英会話コーチ、里山成功哲学コーチなど、マルチに活動している。地域に住む仲間とローカルネットワークを立ち上げ、ゆるい新しい形のコミュニティ作りを目指している。著書に『天上のシンフォニー』(講談社)、『百姓レポリューション』『大変動時代を生き抜く完全サバイバル・マニュアル』(Zen・クエスト)などがある。

Zen・クエスト
<http://www.zenquest.net/>

あまいろ CINEMA NOTE

Vol.2

「ナナイロフーリン映画部」のななつです。映画ばかり観る日々です。ときどき、映画の紹介をしまーす。

『母の残像』

2015年/ノルウェー、フランス、デンマーク、アメリカ合作映画/109分/監督 ヨアキム・トリアー/出演 ガブリエル・バーン ジェシー・アイゼンバーグ イザベル・ユベール デヴィン・ドルイド

美しい散文的な映像が魅力の作品です。

著名な戦争写真家であった母イザベル。戦場を伝えることを自分の使命とし家庭にはほとんど居なかった母の突然の死から3年。開催されることになった回顧展の準備のため、結婚しはじめての子どもが産まれたばかりの長男のジョナは、やさしい父ジーンと引きこもりがちな弟コンラッドが暮らす実家に戻ってきます。イザベルの死には事故なのか自殺なのかなど不可解な部分が多くあり、当時まだ幼かったコンラッドにはその真相は隠されていました。

夫と2人の息子はそれぞれに母を想いながら、マクロとミクロをダイブする。自分、家族、世の中、理不尽な出来事。そして、画面に映る母イザベルの「顔」は女のリアルな生を、その「声」は母の存在の浮遊感を表します。ここが見どころ。母イザベルを演じる女優イザベル・ユベールが本当に素敵です。

【ブログ】ナナイロフーリン映画部@和室上映会
<https://nanatsuweb.wordpress.com/>

ふたりの絵本作家にきく

子どもたちへの思い

今回の特集は絵本作家さん対談！伏原納知子さんと市居みかさんのお話です。今年で三年目となる、原発事故後の福島のごどもたちを支援する『十二人の絵本作家が描く応援カレンダー』。その立ち上げから企画に関わり、絵も提供されているお二人の『絵』をめぐるこれまでの歩みと出会い、子どもたちに伝えたい思い、などなど、お話をたっぷり聞いてきました。(特集面編集/志音未来)



市居みかさん

伏原納知子さん

▼始められたのは何年ですか？
のじこ／一九八二年。今年、三十五年目です。

▼最初はどんな展覧会でしたか？
のじこ／私、アフリカが好きでよく行ってたんですけど、画廊を始めたらかなかなか行けへんと思って、開く前に一カ月ぐらい行ったんですよ。その時に向こうの絵描きさんが見つかつたら、その人の展覧会をやるうと思つていて、ケニアの絵描きさんと知り合つて、その人の展覧会を最初にやりました。

▼じゃあまったく無名の人！アフリカはなぜ好きやつたんですか？
のじこ／ねー。なぜかは分からないんですけど、動物番組が好きでアフリカに行こうと思つて、最初、動物を見るツアーで行つたんですよ。でもツアーって「日本が移動しているだけ」っていう感じがして全然面白くない。それで次は一人で行こうと思つて。

▼アフリカは最初どの辺に？
のじこ／昔は東アフリカしか行きづらくて、タンザニア、ケニア。ケニアも今みたいに危なくなつたしね。のんびりしてて、独立後の希望がすごくあるいい時代やつたから。みんな貧しいけどそんなに貧富の差もなかったしね。田舎で、人もいいし。楽しかったですね。スケッチしたらバアーと人だかりになつて。絵を描いているのを見たいのかな。子どもをずっと描いてたんですけど、そのうちだんだんだん人が来るやん。そしたらそのうちおっさんたちが「俺を描け」って。最後はおっさんばつかり！

▼笑
のじこ／写真撮られるのを嫌がるマサイの人とかはね、絶対カメラ向けたらあかんとか昔から言うでしょ。その人らも「俺を描け」って言われるから、絶対のカットでね。もう必死で描いた。描いた絵を見せると、並べてニコニコとして、でもその絵を欲しいとか全然言わはらへんのよね。

▼へー面白い。アフリカの土地と人とかも魅力的ですか？
のじこ／そうそう。なんかあの生き生きした活力にあふれた人にすごい魅力を感じて。

▼そのケニア作家の展覧会以降は？
のじこ／それ以降ねー。なんかもう、お願いしながら。でも、みんな名のある偉い先生に頼んでやってはるけど、それ嫌やなって思つたんで、いろんな人にね(笑)

▼おもしろい人がたくさん来はるって聞いたことあります！(笑)
市居さんとのじこさんの出会いはいつ？
市居／二〇一三年にあった『手から手へ展』っていう展覧会です。

▼えっ！じゃあ最近ですか？
のじこ／でも、みかさんのおつれあいの宮本一さん(木版画家)は、画廊を始めた頃によく来てはつたんで、ずっと昔から知ってる。

▼へー！あ！おもしろい人や！(笑)『手から手へ展』っていうのは？
市居／スロバキア在住の降矢ななさんという絵本作家が、三・一一の原発事故後、子どもたちはどういう世界を残していきたいかっていうことで仲間たち呼びかけて、展覧会を企画されて。日本からもみかさんのメンバーが参加して、まずヨーロッパで巡回展をされたんですよ。

のじこ／日本では二〇一三年から。うちの画廊でもやりました。
市居／ほんまに京都に堺町画廊があつてよかった。作家さんがやつてる画廊っていう意味でも貴重やし、そういう原発のことを扱ってくれるっていう意味でも、ものすごい存在やと思います！私、今日はこれを言いに来たんですよ！

三・一一のあとに
▼のじこさんの社会的な問題に対する感覚は、いつ頃からありましたか？
のじこ／どうでしょうかねえ。学生運動時代、七十一年の沖縄返還の頃が高校生なんです。その辺からですかね。

市居／ご両親はどんな？
のじこ／もう全然違う。運動に関わり始めてからは、親との軋轢もすくく。

▼市居さんが社会的な問題について発信するようになったきっかけは？
市居／やっぱり三・一一がいちばん。それまでは原発のこと聞いてもぼーっとしてたけど、「もうあかんわー」って気持ちになつて。

のじこ／みかさん達が作った『まずは知らなきゃね』のチラシ、感激した。
市居さん／あれは、原発事故後に滋賀に「ネットワークあすのわ」ができてすぐの頃、原発のことを知ってる人はこの事故についてすごく恐怖を感じているけど、まだ多くの人は自分たちには関係ない遠いところで起きた事故ぐらいにしか思つてないことが分かつて。事故後すぐでも大きな温度差を感じて。だから、「まずは知らなきゃね」って、そういうチラシを作るうって、市居さんと二人で、うちで作つてんな。ほんで、わかりやすいように、市居さんに表紙に漫画を描いてもらつて、中と裏

は私が書いて。

市居／今見たらあの漫画、四コマしかない(笑)
▼市居さんにとつて、そういうテーマで発信するのは初めてのことだった？
市居／うん、そうかも。やっぱり絵で伝えたいなと思つて、「あすのわ」で開催したアースデイで『NO！原発展』も企画したり。描いてくれそうなる人に声をかけて、そこから作家同士のつながりができてきてよかつた。

▼絵本作家という立場でそういう声を上げていくことって、どんな気持ちなのかな？
市居／絵本作家の中でもいろいろいるし、絵本作家が政治的なことを言うべきじゃないって人もいる。

のじこ／でも、子どもと関わっている人は、発信せんとあかんのちゃうって思うねん。未来のことがね。

市居／かわいいい絵本を描いてたらいい、夢を売る仕事、みたいなイメージもあるけど、一端ではぜんぜんそんなじゃなくて、子どもがちゃんと育つていつてくれれないと絵本も読んでくれへんし、仕事の根幹にかかわることやし。ほんまにもうね、三・一一のあと、絵が描けへんようになった。それまで芝生に寝転んだ絵とか描いてたわけやけど、原発事故によってそれができない子どももいるのに「草の上に寝転がるう」なんて描けへん！すべてが関わっているのに、それを抜きにして楽しい世界ですよって描くことに、すごく欺瞞を感じて。社会的な問題と自分の仕事とは切り離せへんって思つたから。

のじこ／私もやっぱり、三・一一は大きいです。画廊も、あんまり政治的なことは…って言われるんですけど。画廊は一度はやめようと思つてたんですよ。やめて自分の制作に打ち込むうかと。でも、三・一一の後は、自分が何かを作ることができなくて、手につかなくて、「画廊を使つてやらなあかんこといっばいあるやん、爆発してやつてやるう！」って感じだった。市居／堺町画廊があるってことが、すごい励みになつて。絵を描いて、画廊やつて、そういうこともやるって、すごいと思います。

のじこ／昔、気を遣つていた時代より自分は今、楽です。
▼堺町画廊で、社会的なテーマに関しても発信してくださるから、みんな「言つていいんだ！」って。
のじこ／わりと深い話をしないで来た人に、こつちが思つていることを言つちゃうと、「ほんまはそうやと思つた」って。まあ、それで「ここはちょっと…」と思う人もいろいろあるけど、付き合つて楽しい人が集まるようになってきた。

市居／わかりやすくなつたよね。
十二人の絵本作家が描く応援カレンダー
▼市居さんとのじこさんも絵を描かれています。『十二人の絵本作家が描く応援カレンダー』はどうやって？
市居／それも「まずは知らなきゃね」のチラシを原子力工学者の小出裕章さんが、水戸喜

世子さんっていう方に渡してくれたのが縁で。喜世子さんは小出さんの反原発の師匠。水戸巖さん(物理学者)という方のおつれあいさんで、反原発の運動をしてきてはる人です。たーさん／そしたら、喜世子さんから手紙が来て。うちと市居さんに。

市居／衝撃的な手紙をいただいで、喜世子さんの娘さんでデザイナーの晶子さんも一緒に、滋賀まで会いにきてくれたんですよ。喜世子さんが「子ども脱被ばく裁判」とかの費用も大変やから、絵本作家のカレンダーを作つて、毎日みんなに絵を見て子ども達への思いを感じながら使つてもらつて、その売上を援助ができないかなって言われて、じゃやりましたよ。かかって始まつた。

▼それまでに出来ていた絵本作家さんの繋がり、市居さんが声をかけて？
市居／そうそう。のじこさんにも声をかけて、ね。

▼もう何年？
市居／三年。最初は恐る恐る千部刷つて、何回も刷り増して。どんどん部数も増えて、今年八千部刷つたけど、もうなくなる。

▼カレンダーの反応は今どんな？
市居／やっぱりすごい。発送したり大変な部分を応援してくれる人が増えてきて、各地方でたくさん請け負つてくれたり。

のじこ／毎年楽しみにしてくれてはる人もいて。堺町画廊でも売つてるんですけど、十冊と買って買いに来はる人もいたり。

子どもたちへの思い
▼市居さんは、カレンダーのこととか、原発の展覧会のこととか、三・一一からそういうことに自分で積極的に関わり出して、自分自身の表現が変わつていっていることありますか？
市居／まだ全然実現できてへんけど、絵本に願いのようなものが入つていてほしい、入つたものを作りたいな、と思うようになってきた。子どもたちが健康に幸せに暮らしていける事とか、そのためにはその子どもたちが、嫌な事は嫌って言えたりとか、人の顔色ばかり伺うような大人にはならんってほしいとか、そういう思いがいっばい出てきて。いいパラソスで、絵本とかお話とかもこれから作つていけたらいいなと思つてます。これ『いまこそ知りたい！みんながまなぶ 日本国憲法』(全三巻、ポプラ社、二〇一六)っていう本なんやけど、「まずは知らなきゃね」チラシをやつたからきた仕事で。

▼すごい、大作！
市居／編集者でも、同じような考えの人がいって、「まずは知らなきゃね」みたいに漫画でやつて言つてくれはって。だから、あれをやつてよかつた(笑)。これにコラムも書いてたんですけど、やっぱり子どもたちにもどういふふうに生きていってほしいのかが一番言いたくて、こう書きました。『…オトナの言うこと、政治家の言うこと、テレビの言うことを「ほんとかな？」と一度は疑つて、自分で調べ考える癖を付けてください。インターネットなら外国のニュースだつて見ることがあります。本

を読むことも大事です。アンテナをピンと立てて、広い視野で世界を見てください。』それからこれは基本的な権利の巻なんですけど、それについて『ぼやぼやしている』と、大事な権利はすべて奪われてしまふかもしれません。おかしいことはおかしいと声にしていくこと。空気なんて読む必要はないんですよ。それはわがままじゃなく、みんなにそういう権利、幸せに生きる権利があるからです」と書きました。

今の日本っていらんガマンさせられてる。で、「ガマンする方がエライ」みたいな。学校とかもそうやし、そういうところに押し込められてるから、今の世界になつてくるんちゃうかなと思う。子どもたちにはそんないらん苦労とかしてほしくないし、いらん苦労をみんながしなかつたら、もつといい世の中になつていくんちゃうかな、と思つて書きました。

のじこ／子どもが空気読むとか、ほんとにかわいそうって言うかね、やめてほしい。今の小学校とか中学校は大変やなつて思う。「黙らされる」ことが大人社会の縮小版で凝縮されてるね。競争もさせられるし、いじめとかも出てくるし。子ども時代を楽しくみんなまで、言いたいこと言つて、暴れて生きな、よねえ。それがエネルギーになつて大きくなるの。

市居／ガマンがいい方に向かえばいいけど、ガマンすることによってよくない方に行つてる。大人が率先して「イヤヤ」って言うていかへんと、子どもも言われへんよね。大人ががんばらなアカンな。大人が言いたい事を言つてやりたいことをやっていくこと。私も自分のやりたいこと、絵を描く事やたらいくらでもやつていきたいと思つてます。

▼ほんと？それ言つていて、あとで締め切りで泣く…？
市居／まあまあ、まあまあ(笑)
▼たまに「こんなに引き受けるんじやなかつた」とかぼやいているから(笑)
市居／まあまあ、まあまあ(笑)でも、ほんまにイヤなことばやつてないんですよ。やりたいと思つことだけやる。

▼太字やな、ここ。(笑)
市居／わがままかな、とも思うけど、ムリしても続かへんし。

▼それ大事ですね。やりたくなくて締め切りがあるのと、自分がほんとにやりたいものを出す締め切りっていうのと、違うもんね。あれは、楽しいぼやきなんだね。

市居／そうなんです(笑)
▼たぶん、のじこさんもそうかと。
のじこ／私結構、てんやわんや(笑)。いっぱいやり過ぎて。

▼画廊の枠を超えて。
のじこ／超えたいと思つたんです。そんなの、こたわつてもね。

▼ありがとうございました！